


 書評

David A. Tomb 著／神庭重信監訳

レジデントのための精神医学 第2版

澤 明

この「レジデントのための精神医学 第2版」は、神庭教授ご自身が所属され教官を務めておられたメイヨー大学(Mayo Univ.)において、必携の本として考えられているものであるようだ。第1版が日本語に翻訳されたのは約十年前であったが、今回精神医学の発展に伴い改訂された第2版の翻訳が完成するにあたり、私は大きな期待をもってこの本をひもといてみた。

この本の最大の特徴は、臨床の場で「具体的に」役に立つ教示が、実に「論理的」に構成されているということである。臨床における「具体性」とは多くの場合「論理性」とは相反しがちなものであるが、これらを実にうまくまとめている点は注目すべきであろう。まさにポケットブックとしては、最大の効果を示していると言えよう。

私は、精神医学の本としては3つのタイプを併用して持つことが最も生産的であると考えている。データベースのようにありとあらゆる知識、知見が網羅されている分厚い成書は必携であるが、これらを直接臨床の場にフィードバックさせることは、特に研修医、学生には容易なことではない。また、精神医学が「自然科学としての医学」に完全に徹しきれない側面がある以上、精神医学の考え方(個々の知識というよりは精神科医療に生かされるさまざまな学問体系の関連についての考察)についてまとめた本も必要であるが、これもまた初学者にとっては現場とのかかわりを見いだすことが難しいだろう。評者はこの二者をバランス良く臨床の場につなげられるようなコンパクトな本を3つ目のタイプとして考えているが、まさに、本書はそれに該当する。

日本においても、精神科の研修をいかにしてより組織化されたものにするか、についての議論が日々交わされているようであるが、米国の大学の研修システムでは、最初の1年間のインターンシップを含む総計4年間の「レジデントプログラム」として、体系的に専門性を学ぶ、学ばせることが期待されている。各有名医学校には、それぞれ大学自身の特徴を出すような教科書やマニュアルが存在し、精神科を目指す多くの医学生はそれらを指標に自身の将来の医学研修の場を選ぶ。もちろん、よい「レジデントプログラム」を提供できる大学病院の競争率は高く、大学サイドでもかなり厳しく全国からの応募者を選考する。日本では、自分が卒業した医学校からそのままその大学附属病院で医師研修をすることが多いが、米国においては「レジデント」研修の場を選択する際は、自身の医学校とは関係ない。自分自身の興味、将来の方向性を検討して、それに最もよく合った大学病院を求めて研修の場を探そうとするので、人の流れは実に大きくシャッフルすることになる。ここには良き意味での相互競争原理が存在する。神庭教授も所属されていた米国の医学校の頂点のひとつ、メイヨー大学はよき臨床教育で知られるが、この大学でこの「レジデントのための精神医学」が必携として用いられているのもうなずける、良質のポケットブックである。

精神科医療に携わる若手には特に推薦申し上げたいと思う一冊である。

(ジョンズ・ホプキンス大学助教授/精神医学部門、神経科学部門)

●B6 333頁 2002 本体4,000円 メディカル・サイエンス・インターナショナル刊